

ここまでのまとめ

- 日本の生物多様性は、開発や乱獲といった人による直接的影響で損なわれているだけでない。
- 里地・里山の管理停止や外来種の侵入などによる人による間接的影響も非常に深刻である。

>> 保全を行う現場の生物多様性に、どのようなリスクがあるのか十分な評価を行うこと、そしてそれに対応する対策を立てることが大切。

51



1 2 3 4

生物多様性を守るための考え方

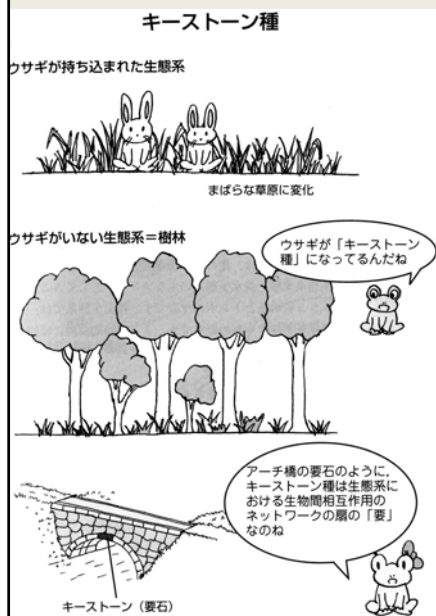
52

保全活動上、知っておきたいこと

- その場所の生態系を特徴づける種について
 - その場所の生態系を特徴づける種、重要な意味を持つ種に着目を
- 絶滅の起こる過程について
 - 生物種の絶滅がどのような過程をたどって起こるのか？
どうなると危険なのか？

53

キーストーン種



- キーストーン: 石のアーチを安定させるため、頂上に打ち込む楔形の石
 - 生物量が少ないにもかかわらず、その生態系の安定の上で非常に重要な働きをする種。
 - その生物がいるかどうかで生態系が大きく変わる
- ただ、その種がいなくなってみて初めてキーストーン種だったことがわかる例も

イラスト出典: 『絵でわかる生態系のしくみ』

54

そのほか保全上の指標となる種

- アンブレラ種
 - 広大な生育地が必要な種。その種を存続させる環境を維持することは、そのまま下位の栄養段階の種をも保全することにつながる。
 - オオタカ、ツキノワグマ、(知多半島では)キツネ
- 危急種
 - 希少性や絶滅危険性が高い種。環境の変化に鋭敏なため、この種の保全は必然的に他種の保全にもなる。
- 象徴種
 - その美しさや魅力によって世間に特定の生育環境の保全をアピールする種。

55

絶滅の渦

- どの生物も、絶滅に至る過程では次のような経過をたどる(絶滅の渦)。
- 絶滅の渦に巻き込まれた生物は、脱出するのは難しい。

56

絶滅の渦

何らかの原因による個体数の減少

•近交弱勢

– 近親交配による死亡率の増加

•人口学的確率性の問題

– 天変地異などの偶然性が大きく響くようになる

•遺伝的浮動による固定

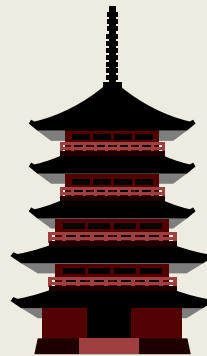
– 遺伝的多様性が低下し環境の変化に弱くなる

個体数が加速度的に減少し、絶滅に至る。

57

最後に…生物多様性は「文化財」

- とてつもなく長い歴史の中で生まれてきた
- 土地ごとに固有の文化(生物相)がある。
- 失ったら二度と取り戻すことができない



58

参考文献

- 武内 和彦・恒川 篤史・鷺谷 いづみ(2001)『里山の環境学』東京大学出版会
- 生物多様性政策研究会編(2002)『生物多様性キーワード辞典』中央法規
- (財)日本生態系協会編著(2006)『環境を守る最新知識 第2版』信山社
- 鷺谷いづみ(2008)『絵でわかる生態系のしくみ』講談社
- 鷺谷いづみ(2010)『<生物多様性>入門』岩波ブックレット